

---

# 妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

たすく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

### 【Nコード】

N3941Z

### 【作者名】

たすく

### 【あらすじ】

「来い」の一言が書かれた手紙を持って現れたのは、蔵馬（南野秀一）だった…！ 新世紀エヴァンゲリオンと幽遊白書のクロスオーバー作品。碇シンジの位置に蔵馬（南野秀一）。他のキャラも登場予定？

自サイトより転載。2000年ごろ書いた『妖世紀エヴァンゲリオン - Ayakashi Genesis Evangelion -』のリメイク版です。内容的には変わっていないかと思われるま

すので気を付けてください。

## 第壹話 転生

魔界と霊界。

魔界とは、数々の妖怪が住む世界。

霊界とは、『あの世』と呼ばれる世界。

魔界は、何階層にも別れており、上層部の一部を霊界が管理している状態である。

その管理している階層において、霊界の法における犯罪を犯した妖怪を退治する『ハンター』と呼ばれる存在がいる。

その『ハンター』が今、魔界において一匹の妖狐を追いつめていた。

「俺としたことがっ！！」

銀髪の妖狐がハンターから逃げていた。

ハンターの霊的攻撃のため、体のところどころに怪我を負っていた。

「このままではまずい。確実に殺される」

ハンターは、犯罪者を捕えて法に照らし合わせて裁くというより、その場で狩る（処刑）することが多い。

妖狐は魔界を脱出し、人界に向かう。

しかし、ハンターはまだ追ってきていた。

そして致命的な一撃を受けた。

「ぐあ…ここまでなのか…」

妖狐の意識がとぶ直前、目の前に穴が見えた。

「…！」

穴に吸い込まれ、妖狐の意識がとんだのだった。

妖弧の意識が戻る。

「これは……」

動けない体。

「俺は… そんな事が…」

……

……

……

……

……

…

目の前にいるのは人間の女性だった。

妖弧は人間として転生したのだった。

時に2000年…

伝説の極悪盗賊と呼ばれた妖弧蔵馬は人間として生を受けた…

## 第貳話 第三東京市

2015年……

あれから15年……

親戚の家に預けられていた蔵馬は、人間としての父である人物から手紙を受け取る。

『来い』

その一言と、謎の女性の写真。

（いったい今更、何のようだろう。関わりたくないんだけど…）

そう思いつつも行ってみることにした。何となくだった。

これが苛烈な戦いの始まりだったのである。

そして、蔵馬が、第三東京市につき、リニアを降りたときだった。

『本日12時30分、東海地方を中心とした、関東地方全域に特別非常事態宣言が発令されました。住民の方々は速やかに指定のシelterに避難して下さい。繰り返しです…』

「特別非常事態宣言？ それはなんだろう。今の状況では判断できない。まあ、手紙に書いてあるところに電話して、情報を集めよう」  
動揺するところか、冷静になった蔵馬は、封筒に書かれた電話番号で、電話を試みる。

『特別非常事態宣言発令のため、現在通常回線は全て不通となっ



ております。繰り返し…』

「不通か」

とりあえず、状況を判断すべきその場を動かず、周りを見回す。人っ子一人いないが、変わった様子は見られない。

そして、上を見上げると、普通では飛行してないモノを発見した。戦闘機だ。

「ん…？」

よく見ると攻撃をしているようだ。かなり遠くに煙が上がっている。

（戦争でも始まったのか？）

煙が少しずつ晴れていく。そこには巨大なモノが見え始めた。人型したモノだった。

（妖怪…？ ではなさそうだが。）

そう思っただけでいると、一台の車が走ってくる。

その車が、蔵馬の前に止まり、一人の女性が出てきた。

「南野秀一君ねっ！！ 遅れてゴメンッ！！ 乗ってっ！！」

「葛城ミサトさんでいいですね？ あれはいったい何ですか？」

（あの写真の女性だな。）

「落ち着いているわねシンジ君。 あれはね、使徒よ」

「使徒？」

「そっ…って、NN地雷っ！ 伏せて秀一君っ！！」

ミサトは蔵馬を抱えて車の中で伏せる。同時に大爆発が起き、その爆風で吹っ飛ぶ車。

「大丈夫だった？」

「ええ。砂が口に入っただけです」

「そいつは結構。じゃ、行くわよ」

ミサトが横倒しになった車を元に戻そうとするが、女性一人では持ち上がるわけがない。蔵馬も手伝い起こした。

「ありがとう。意外にパワフルなのね。よろしく。南野秀一君」

「こちらこそ。葛城さん」

「ミサト、でいいわよん」

そのころ、ネルフ作戦本部……

「ミサイル攻撃でもきかんのか！？ 全弾直撃のはずだぞ！！」

「クソがッ！！」

目の前のモニターには、いつさいの攻撃を受け付けないモノがうつっている。使徒と呼ばれるモノ。

その使徒を何とかしようとしてる軍人たちの後ろにサングラスの男と初老の男が立っている。

軍人たちが何処からの通信を受け取り、苦々しい顔しながら、その二人にいる後ろを向いた。

「南野君。これより本作戦の指揮権は君に移った。お手並みを見せてもらおう」

「了解です」

サングラスの男が言う。

「南野君。我々の所有兵器では目標に対し有効な手段が無いことを認めよう」

「だが、君なら勝てるのかね？」

口々に言う軍人たち。不快感は顔に浮かんでいる。

「そのためのネルフです」

南野は確信を持って言った。

「期待しているよ」

軍人たちはテーブルごと本部から退場した。

「国連軍もお手上げか。どうするつもりだ？」

南野の横に立っていた初老の男が口を開いた。

「初号機を起動させる」

「初号機をか？ パイロットがいないぞ」

「問題ない。すぐに秀一が来る」

（しかし、何故だ… 私が入手した死海文書の予言より、一年遅い… 何か不確定要素でも入ったのか…）

## 第参話 特務機関ネルフ

「特務機関ネルフ？」

「そ。国連直属の非公開組織」

「父がいるところですね？ 俺に何をさせるつもりですか？」

「それは、お父さんに会って聞いた方がいいわね」

「そうですか」

（国連直属… 情報統制は相当のモノのようだ。）

（取っつき難い子ねー。でも、なんで長髪なのかしら？ 似合っているから良いけど。）

しばらく二人で無言で道を進む。が、ミサトは道に迷ってしまったようだ。

「ここ、さっき通りませんでしたか？」

「ごめえん。まだ道になれてなくて」

「……………そうですか」

冷めた目で見られたのは、ミサトの見間違いではなさそうな気がした。

（なんて、冷静…）

「さっき通りましたね。ここも」

「…」

ミサトは何も言えなかった。

それからしばらくウロウロという表現が正しいと思うぐらい、道を進む。二人はもちろん無言だ。

（組織員としては、迷子とは失格だな。）

蔵馬のミサトへの第一印象はよくない。そこへ後ろから二人に声かけられる。

「どこへ行くの？ 葛城一尉。」

ミサトと蔵馬が同時に振り向く。白衣を着た金髪の女性が立っていた。

少し冷たい感じのする美女だった。

「遅かったわね。」

「ごみいん！」

ミサトが顔の前で手を合わせ、謝る。

「例の男の子ね。」

「そう、マルドウック機関から選ばれたサードチルドレン。」

「わたしはネルフ技術一課E計画担当博士赤木リツコ。よろしく。」

「南野秀一です。よろしく。」

『総員第一種戦闘配置。繰り返す、総員第一種戦闘配置。対地戦用意。繰り返す…』

突然、館内スピーカーから放送が流れる。

「ですって」

「これは一大事ね」

「それで、初号機はどうなの？」

「機動確率は0.00000000001%。09システムとはよく言っただものだわ。」

「それって動かないって事？」

「あら失礼ね。0ではなくってよ」

「数字の上ではね。でも、どのみち動きませんでした。じゃもう

すまされないわ」

二人の会話に我かんせずの蔵馬だったが、ふと蔵馬は一つ思った。

（たぶん父さんが呼んだのは、このためだな。）

蔵馬はミサトとリツコにある部屋に入る。ミサトが入り口を閉めると真っ暗になった。

「真っ暗ですよ」

リツコがスイッチを押す。

ライトがつき、蔵馬の眼前に巨大な鬼のような顔がある。

（靈気も妖気も感じない。いわゆる巨大ロボットというモノなのか。）

「ロボットと思ったと思うけど厳密に言うとロボットではないわ。人の造り出した汎用人型決戦兵器。人造人間エヴァンゲリオン。その初号機」

（人造人間……？）

「これが父の仕事ですか？」

「そうだ」

エヴァの頭上から声がかけられた。管制室と思われる部屋のガラス越しに自分の父親、南野ゲンドウを見つけた。

「久しぶりだな」

「……………」

「…出撃」

ゲンドウがつぶやく。

「出撃！？ 零号機は凍結中でしょ！？ まさか、初号機を使うつもりなの！？」

「他に方法はないわ」

「だってレイは動かせないでしょ？」

ミサトは蔵馬をチラツと見る。

「パイロットがいないわよ」

「さつき届いたわ」

「…マジなの？」

リツコはミサトから蔵馬に視線を移す。

「南野秀一君。あなたが乗るのよ」

「お断りします」

「即断なのね…」

「俺はよくわからない状況では流されないんですよ」

「座っていればいいわ。それ以上は望みません」

「お断りします」

「秀一君…！」

「正規のパイロット？がいるでしょう？　その方が乗れば良いんじゃないんですか？」

何も言えなくなってしまうリツコ。そこへゲンドウから一言。

「…そうか。冬月、レイを起こせ」

## 第肆話 出撃

しばらくして、廊下から包帯で巻かれた少女が運ばれてくる。ミサトが何か言っていると苦痛の表情で起き上がろうとするが、痛みか、すぐ倒れこんでしまう。

(…………… 正規のパイロット？が、この状態で乗せようとするのか。)

それを観察している蔵馬。少女は何度も起き上がろうとするが、すぐ倒れてしまう。包帯からは血が滲み始めていた。

(…………… 怪我の治療は適当、いや出鱈目だな。)

(…………… 父さん、いやあの男は何を考えている。俺を乗せるための作戦か？)

(…………… さっさと帰りたいところなんだけど見捨てることはできないな、よし。)

「彼女をのせるのですか？ ミサトさん？」

少し冷たい声をミサトに向けた。

「そうよ」

「では、俺が乗れば彼女をちゃんと治療してくれるのですか？」

「え？」

「傷口が開いているようですよ。出血が酷い」

ちらりと少女を見る蔵馬。

「……！ わかったわ」

「了解。……父さん」

少女から、ゲンドウの方へ目を移す。

「なんだ？」

「後で理由を聞くことにしよう」

「……………」



「………… えっと、それではどうすればいいんでしょうか？」

蔵馬は、声のトーンを少し上げミサトに聞いた。答えたのはリツコだ。

「私が教えるわ。ついてきて頂戴」

「わかりました」

「停止信号プラグ。排出終了」

「了解。エントリープラグ挿入」

「第一次接続開始」

「エントリープラグ、注水」

エントリープラグ内を黄色い液体が満たされていく。

蔵馬は着の身着のままの制服姿だ。黄色い液体で濡れていくのは多少気持ち悪い。

「何ですか？ この怪しい水のようなモノは」

ゆつくりと黄色い液体が上がってくる。感触はあまりよろしくない。

「ＬＣＬと呼ばれるモノよ。大丈夫。肺がＬＣＬで満たされれば直接血液に酸素を取り込んでくれるわ。すぐに慣れるから」

「慣れたくないですね」

「…… そう」

（結構毒舌家なのね。きれいな美少女顔しているのにね。女装すればモテモテなんじゃないのかな。）

場違いの事を思うミサトだったが、すぐ気持ちを入れ替えた。

（その辺の事は生き残ってからにしましょうか。）

ＬＣＬに満たされながら、蔵馬は違和感を感じた。

（妖気でも霊気でもない… 何かいる…）

「A10 神経接続開始」

（神経接続？ 思った通りに動かすことができるのか？）

「思考形態は日本語を基礎原則としてフィックス」

「初期コンタクト問題なし」

「シンクロ率……… え？」

オペレーターの一人が目を疑う。

「どうしたの？」

「あ、すいません。シンクロ率、78・27%」

「なんですって!？」

その報告を聞いて、リツコが驚愕する。初めて乗った人間が出る数値ではなかったのだ。

「計測器は？」

「全て正常です」

オペレーターが機器のチェックを行うが、異常はなかった。何度も確認するも異常はなかった。

「…………… すごいわね」

驚きの声を上げるミサト。

「ハーマニクス、全て正常位置。暴走、ありません」

「いけるわ、発進準備!!」

ミサトの号令が響く。

そして発進準備が一通り終わると、ミサトはゲンドウの方を向いて聞く。

「かまいませんね」

「もちろんだ。使徒を倒さぬ限り我々に未来はない」

それを聞いて無言でうなづくミサト。

「発進!!」

すさまじいスピードで打ち上げられる初号機。そして地上に射出される。

しかし、場所をわかっていたかのように、使徒が現れた。

（そういえば、作戦聞いていなかったな……）

## 第伍話 自爆

エントリープラグ内の蔵馬。

「敵の前に出されても困るのですが」

「う」

「確か作戦もないですよね？」

「う」

「次回があるかどうか知りませんが、その時はちゃんとしてください」

「……はい」

「何やってるのかしら？ ミサト？」

通信にリツコが割り込んでくる。

「リツコさん？ とりあえずどうすればいいのでしょうか？」

「秀一君。まずは歩くことだけを考えて」

「了解」

蔵馬は歩く事を考えるとエヴァは使徒向かって歩き始める。

（なるほど）

目の前に待ち構えた使徒がビームをエヴァに向かって発射。間一髪かわすと、後ろのある射出口のある建物が蒸発した。

（危ない危ない。しかしアレはなんだ？ 妖怪の類ではないようだが。）

ビーム発射後、ジャンプしていたであろう使徒が空から降ってくる。そして、頭を鷲掴みにされた。

そのまま、地面に叩き付けられる。

「ぐっ！？」

（叩き付けられたのはこのエヴァとかいうロボットの頭だ。なに何故俺までダメージが来る！？）

（……そうか、ダメージもフィードバックされるというのか。）

使徒の胸部を攻撃し、なんとか拘束から逃れる。  
今の一撃でエヴァ頭部が損傷したらしい。赤い液体が流れ出ていた。

『生命維持に問題発生！ パイロットが危険です！』

ミサトはこれ以上の戦闘はムリと判断した。

『作戦中止！ パイロット保護を最優先！ プラグを強制射出して！』

「待つてください」

しかし、オペレータたちの了解の言葉より先に蔵馬の発令所に響いた。

『秀一君！？』

「この操縦のコツがだいぶ判ってきました。大丈夫です」

助走して使徒へ殴りかかる。しかし、壁のようなモノで弾き返される。

弾き返された瞬間、八角形の波紋のようなものが流れた。

（なんだ今のは？）

くるりと一回転して、着地した。

『A・T・フィールドと呼ばれるものよ。詳細は残念ながらわかってないわ』

リツコから通信が入る。

「えーていーふいーるど？」

『現時点でわかっているのことは、壊さない限り使徒には近づけない、それだけよ』

「…… わかりました」

使徒はA・T・フィールドを張ったまま、突っ込んできた。対応しようとしたとき、突然制御不能に陥った。

ドクン

そして吠えた。

「ウオオオオオオオオオオンンン！」

（何！？突然動かせなくなった。頭部破壊で異常発生したのか。

襲い掛かる使徒の A・T・フィールドに手をかける。そして、と無理矢理こじ開け始めた。

「グルルオオオアアア！」

完全にこじ開けると中に飛び込む。

そのまま使徒の腹部にある球体に一撃を入れた。使徒のA・T・フィールドが消失し、球体にヒビが入る。

何かを感じたのか、使徒がぶるつと震えるとエヴァに抱きついた。

$$\begin{pmatrix} ! \\ ? \end{pmatrix}$$

球体に光が集まりだした。

(これは一体！？)

閃光とともに大爆発が起きる。エヴァと周りの町もろとも……

「使徒が自爆しました!!」

「初号機はっ!!」

「初号機を確認!! パイロット生存!!」

「ほっ…… よかった。回収班および救急隊の出勤を要請して」

「はいっ!」

「南野、勝ったな」

「ああ」

目の前のモニタには、後始末が行われていた。もちろん、この事實は隠蔽される。

突如、司令室の暗くなり、番号の書かれた謎の板が姿を現す。

「使徒再来か。あまりに唐突だな」

「15年前と同じだよ。災いは突然訪れるものだ」

「幸いとも言える…… 我々の先行投資が無駄にならなかった点においてだな」

「そいつはまだわからんよ。役に立たなければ無駄と同じだ」

「左様。もはや周知の事実になってしまった使徒の処置」

「情報操作、ネルフの運用は全て迅速かつ適切に行ってもらわないと困るよ」

「その件に関しては既に対処済みです。ご安心を」

「しかし南野君。ネルフとエヴァもう少しうまく使えんのかね」

「左様。零号機に引き続き、君らが初陣で壊した初号機の修理代。」

国が一つ傾くよ」

沈黙の幻童。

「聞けばあのオモチャは君の息子に与えたそうではないか」

「人、時間、そして金。親子そろって幾ら使えば気が済むのかね」

「それに君の任務はそれだけではあるまい。人類補完計画。これこそが君の急務だ」

「左様。これこそがこの絶望的状况下における唯一の希望なのだよ。我々のね」

「いずれにせよ。使徒再来による計画の遅延は認められん。予算については一考しよう」

「では、後は委員会の仕事だ」

「南野君。ご苦労だったな」

「南野…… 後戻りはできんぞ」



## 第陸話 ゲンドウ

エヴァの暴走もあり、精密検査を行うため、蔵馬はネルフ直属の病院に来ていた。

検査結果が出るまで、廊下のソファで待つことになる。

（とりあえず、父さんから話を聞こう。判断はそれからだ。）

しばらくして、名前を呼ばれて結果を聞く。問題はなかった。

ありがとうございます、と診察室を退室した蔵馬はそのままエレベーターへ向かう。

そこにはゲンドウが立っていた。

「父さん」

「ついて来い」

そう言うとエレベータに乗る。その後へ蔵馬も乗る。

「戦闘前に言った話をしたいんですが」

「今から司令室へ向かう。ここでは無理だ」

「わかった」

司令室につくとそこにはすでに冬月がいた。

「秀一君、大丈夫かね？」

「検査結果は問題ないようです」

「それはよかった」

ゲンドウが席につき、蔵馬は指令席の前に立った。

「話してくれますか？」

「アレは使徒と呼ばれる人類の敵だ。詳細はわかってない」

「敵と判断した理由はなんですか？」

「攻めてきた以上、対抗せざるを得ない」

「目的も不明ですか」

「ああ」

蔵馬はため息をついた。呆れたからだ。

「まあ、今はいいでしょう。何かわかったら話してくれますか？」

「…………… 良いだろう」

（隠し事満載ですか）

ゲンドウが詳細は知っているようだが話そうとしない。薄々と  
感じていたが顔に出さない蔵馬。

「帰るのか？ 帰るのではあれば多少監視を付けざる得ないが」

（非公開組織だから、仕方がない。いざとなればいくらでも誤魔  
化せる。しかしながら、俺自身も興味がわいたのは確かだ。条件付  
きで乗ろう。）

「…………… 条件付きでよければ乗りますよ」

「その条件とは？」

「まずは住居。監視付で構わないのでマンションあたりをお願いします」

「問題ない。すぐ用意する」

「そして使徒。何かわかったら話してください」

「機密以外は伝えよう」

「機密が多すぎるような気がしますけど」

「……………」

「後は、俺が何をしようとも不干渉でお願いします」

「不干渉だと」

「さすがに一日中干渉されるのは嫌ですからね」

「わかった、問題ない。冬月」

「すぐに準備するでしょう。それでいいな、南野」

蔵馬には冬月に丸投げしたように見えた。

「父さん、丸投げはよくないですよ」  
「……………」

半日もたたず、住居であるマンションの一室のカギが渡される。  
場所は、ミサトの住むマンションと同じ階であり、隣同士ではない。  
い。

（親睦を深めるという意味もあるし、監視という意味もある。離れてるのは俺が年頃の男だという事か。興味もないが。）

第三東京市立第三東京高校への転入が決まる。ここは、もちろんネルフ支配下にある学校だ。

美形の転入生徒とあって、女生徒は黄色い声を上げ、男子生徒は嫉妬の声をぼそっと上げた。

（高校生活が楽しめると思えないが、まあいいか。）  
しかしながら、蔵馬はそう思うだけだった。

使徒が来ない間は、一学生として高校へ通う蔵馬。そして、授業が終わるとその足へネルフへ向かう。

名目上は戦闘訓練だろう。ゲンドウからすれば息子の調査であり、蔵馬からすればネルフの調査である。

どちらも詳しいことがわからないまま。

(…………… 俺と志保利の子であることは間違いない。しかし……)  
(組織が組織だけあって、監視カメラが多いな。しかも俺を探っている気配もある。父さんか、ここが気に入らない連中だな。)

その日の訓練でエントリープラグ内にいた。シュミレーション用だが、本物と変わりがない。

『おはよう。秀一君。調子はどう?』

リツコより通信が入る。

「悪くはないです」

『それは結構。エヴァの出現位置、非常用電源、兵装ビルの配置、回収スポット。全部頭に入ってるわね?』

「はい。」

『では、おさらいするわね。前にも言ったけど、通常、エヴァは有線からの電力供給で稼働しています。でも非常時に体内電池に切り替えると、蓄積容量の関係でフルで1分。ゲインを利用してもせいぜい5分しか稼働できないの』

(…………… ウルトラマンですか、このエヴァという兵器は。)

『では、インダクションモードの練習、始めるわよ』

通信が切れるとビル群からこの前初号機が殲滅した使徒が姿を現す。蔵馬は無言のまま、パレットガンから銃弾が照射される。

そして、見事に命中。倒れる使徒。

『その調子よ。次。』

(こんな武器が通じるとはとてもじゃないが思えないな……)

ほぼ100%の命中率を見せる蔵馬。

ガラス越しからリツコ、オペレータの一人伊吹マヤ、その後方でミ

サトがその様子を見ている。

「しかし… よくまた乗ってくれる気になってくれましたね。彼  
マヤがりツコに言う。」

「あの子は強いわ。あの程度でくじけたりしないみたいね」

（でも、何かがおかしい。射撃の腕はゲーセンでと言っていたけど、調査ではそんなのなかったし…）

ミサトは無言で初号機を見ているだけだった。

## 第漆話 逃げ遅れ

前回使徒が現れて数日後、通常通り蔵馬は高校で授業を受けている。

教師が何時ものように脱線が始まった時間、蔵馬の携帯が鳴った。ネルフより持たされた携帯である。

教師に一声かけると廊下へ出る。教師も蔵馬がネルフ関係者と知っているので「わかった」しかわなかった。

電話を見ると『綾波レイ』と表示されている。彼女との接点は少ない。ゆえに電話も今回が初めてであった。

「もしもし」

電話に出る蔵馬。

『私』

簡潔すぎる返答。

「何かあったんですか？」

『非常召集。先、行くから』

そう言つと電話が切れた。と、同時にサイレンが鳴り響いた。

ネルフ作戦本部

「総員第一種戦闘配置！」

冬月の命令が飛ぶ。ゲンドウは不在。

『了解。総員第一種戦闘配置。地対空迎撃戦用意』

「碇司令の留守の間に使徒の襲来か。意外に早かったわね」

「前は15年のブランク。今回はたったの三週間ですからね」  
オペレーターの一人、日向マコトが答える。

「こっちの都合はお構いなしか。女性に嫌われるタイプだわ」  
主モニターには使徒を攻撃する様子が映し出されている。しかし、ミサイルも銃弾も第三使徒同様まるで効果が見受けられない。

「税金の無駄遣いだな。」

冬月が半ば呆れた表情で言う。

「葛城一尉！！ 委員会からエヴァンゲリオン出動の要請が来て  
います！！」

青葉シゲルが叫ぶ。

「うるさい奴らね。言われなくても出撃させるわよ。」

レイが到着し、蔵馬が続いて到着する。

「秀一君、悪いわね」

「作戦ありますか」

「うん。ライフルで牽制して様子見るしかないわね」

「前回から何もわからなかったんですか？」

「映像を見てもらえばわかるわ」

モニタに外の様子が映し出される。そこにはイカの胴体のようなモノが暴れていた。

「なんですか、あれ」

「使徒よ」

「前回とまったく姿が違いますか… これは厄介ですね」

「ゴメンネ。」

「時間稼ぎますから、対処法お願いします」

「わかったわ」

蔵馬はエヴァに乗り、使徒より離れた場所に射出された。

ビルを背に相手の動きをうかがう。

（あのビームの件もある。距離を取りつつ牽制ぐらいしか出来な  
いかな。）

ネルフではなく蔵馬自身で判断した距離を保つ。しかし、うまく隠れているつもりであったが、突如使徒にエヴァの居場所がばれた。

エヴァの方へ移動してくる使徒。それをパレットガンで迎え撃つ。着弾と建物の崩壊で、煙があたりを包んだ。目の前が見えなくなる。

（しまった！）

煙から鞭のような腕（？）が飛び出し、エヴァが持っていたパレットガンを真つ二つにする使徒。

（これがヤツの武器か。）

『予備を出すわ！ 受け取って！』

即座にミサトはエヴァのいる近くのビルからパレットガンを射出。それを受け取ろうとした初号機だが、使徒によって阻まれてしまふ。

その一瞬がスキとなり、電源コードを切断される。

『初号機！ 活動限界まであと4分53秒！』

（なんという反応速度の速さだ。エヴァに不慣れの俺だと追いつけない。）

さらに使徒の腕が初号機の足を捕らえる。そのまま持ち上げると投げ飛ばされた。



町はずれの神社。エヴァはそこへ落ちた。

（見かけ以上にパワーはある。…ん？）

システムがエヴァの足元に何かあることを示していた。蔵馬は足元を見るとそこには……

中学生と思われる人が三人いたのだった。

（逃げ遅れか…！）

足元に気を取られ使徒の接近を許した。使徒の鞭がうなる。

思わず両の手で受け止めた。しかし、エヴァの手が高熱を發した鞭で溶け始める。

蔵馬の腕にも熱さと痛みが走る。

（しまった！ このままでは俺はともかく足元の人たちが危ない！）

## 第捌話 ダブルノックアウト

「!？ 避難してなかったのね!」

「避難遅れというより、好奇心で見に来たというところかしら?」

「リツコ、なんでそんなに冷静なのよ…」

「ミサト、それよりどうするの?」

「使徒はエヴァが、秀一君が抑えてる。でも長くそう持たない。戦闘行為もできない。巻き込まれて最悪死んでしまう」

ミサトは悩む。しかし、判断を下さなければならぬ。そのとき……

『その逃げ遅れが見学が知らないが、こちらに來い』

エヴァの外部スピーカから声がした。

「秀一君!? 何をする気!?!」

『命令違反の懲罰なら十分に後で受けますので、今はこれしかないと思います』

そういうと、エントリープラグを少し射出。そしてハッチを開けた。

「乗せる気!?!」

この動きに反応したのはリツコだった。

「危険よ。そのエントリープラグは、パイロット特化型と言って間違いないわ。異物が入れば何が起きるかわからないわ」

『命令違反の懲罰なら十分に後で受けます』

もう一度そういうと強制的に通信をきった。

時間がない。投げ飛ばされたときに背中中の電源コードが外れていたらしい。活動限界までのカウンtdownが表示されている。

エヴァは使徒に押され膝をついていた。いや、中学生三人を登らせ

るための処置か。どちらにしても蔵馬の限界は近い。

（やはりエヴァは背が高い。登るのは無理か。）

秀一は両手で掴んでいた使徒の手を片手に持ち帰る。そして、手を三人の前に差し出した。

『乗れ』

そういうと、三人は手に乗った。そして背中のエントリープラグへ持っていくとそのままハッチの中へ放り込んだ。

放り込まれた三人。

「うわあああ、み、み、水う。カメラ、カメラ」

「げぼがぼぐぼがぼ……………」

「きやあきやあ、スカートう」

ちらりと見る秀一。眼鏡をかけたカメラを気にする少年。ジャージを着た少年。そして二つに髪を縛ったスカートの広がりを感じる少女。

（少年が見学のために避難所を脱走、気が付いた少女が連れ帰るために避難所を出たというところか。）

問題なさそうなので、ハッチを閉じてエントリープラグを戻す。同時に、エントリープラグ内でエラーが表示された。

『ちよ。ちよっと待ちなさい！ 許可のない民間人を乗せられると思ってるの！？ 秀一君！？』

強制的に通信が入る。ミサトだ。

「もう入れましたが」

さらりと言う蔵馬

『く。仕方ない………… 退却して！ ゲートは34番！ 山の東側よ！』

「了解」

使徒の腕を引き寄せると腹？に蹴りを入れる。腕が切れ吹き飛んで行った。

（今のうちに…）

しかし、時間が残っていなかった。カウントダウンを表示していたモニターの色が変わったのだ。1分を切った。

（間に合わない！？ ならば…）

『秀一君！？』

「時間切れが近いようです。何とかします」

『なんとかって……』

また強制切斷。

（作戦とか俺に丸投げ状態なんだから黙ってる）

そう思う蔵馬であつた。

使徒の腕が再生して、こちらに攻撃を仕掛けてくる。その攻撃をあえて腹で受けた。使徒の腕は貫通し、背中から飛び出す。

「ぐ……」

さすがに苦しい。フィードバックされる痛みや熱さ。耐えられるものではないが、蔵馬は耐えた。

その様子を後ろで見ているしかできない三人。

「私たちのために…」

少女がぼつりとこぼした。

「とりあえず動かないでください。終われば俺の一応上官にあたる人に怒られるかもしれませんが、自業自得です。覚悟していてください」

「はい…」

「すんまへん…」

肩からナイフと取り出す。使徒の球体の部分に突き刺した。使

徒は苦しむが、こちらへの攻撃はやめない。ここは根性勝負だ。  
カウントダウンがついに10秒切った。

（間に合うか!?!）

腕に力をこめる。深くナイフが突き進む。

そして……

エヴァ、活動停止。

使徒、活動停止。

ダブルノックアウトであつた。

「ふう」

蔵馬は一息ついた。

「だ、大丈夫ですか……?」

少女が恐る恐る声をかけた。

「なんとか……」

「ありがとうございます」

「いや……」

お互い腹を貫通し合った恰好のまま回収された。

格納庫につくと三人は、そのまま黒服の大人たちに付き添われて  
出て行った。

「秀一君大丈夫?」

「なんとか大丈夫です」

「リツコに検査受けてきて。あの状態で体にどんな影響あるかわからないから。その後ね、懲罰は」

「わかりました」

（学業優秀、スポーツ万能。人当たりも悪くない。一高校生としては飛び抜けているけど、本当に高校生なの？ 一流の傭兵を相手してるような気がするわ。）

リツコの職務室。実験室と言っても差し支えない様子の部屋だ。  
蔵馬はそこへ呼び出される。

精密検査の結果が出たので、それを伝えるためだが、蔵馬に対して何かあると踏んでいるらしい。

「秀一です」

「どうぞ」

「失礼します」

扉を開けて部屋に入る蔵馬。

「精密検査の結果でましたか？」

「ええ。でも特に問題は見つからなかったわ」

「そうですか。ありがとうございます」

「ただ…」

「何かありましたか？」

「いえ、何でもないわ」

（検査結果に何か出たのか？ 人間ではなく妖怪としての妖狐としてのナニカが。）

「何か質問ある？」

「えっと、本来はミサトさんに聞くべきかと思うんですが、俺が助けた少年少女たちはどうなりましたか？」

「精密検査においては異常は見られなかったわ。出ると思ったけど良かったわ」

「そうですか」

一安心する蔵馬。自分自身もよくわからないモノに入れてしまったのだ。何かあってはたまらなかった。

「後は、ミサトに怒られてた」

「まあ、そうでしょうね」

「ここからは蛇足だけど」

「？」

「お下げの女の子と眼鏡の男の子の親族は、この関係者らしくてね。ミサトから解放された後怒られていたわ」

「なるほど。それは災難でしたね、彼ら」

（……探りを入れてきたのか？）

蔵馬は警戒をする。ただし、顔や態度には一切出してない。

「そうね」

「では。俺はこれで失礼します」

「お疲れさま」

蔵馬はリツコの職務室を退室した。

蔵馬が出て行ってからしばらくして。リツコは精密検査の結果を見ながら溜息をついた。

「かわった子ね。まあ、あの人の息子だからなのかしら？ それに…… 彼、人間？」

精密検査の結果には、不審な点は一切ない。健康そのものであると書かれているようなものだが、リツコは違和感を感じていた。ほんのわずかな違和感を。

「要観察かな。私個人の……」

数日後。倒した使徒のまわりはまるで工事中のビルのように囲われている。



その中では優秀なネルフのスタッフが十数人もかかって、使徒を調べている。リツコの姿もあった。

そこに、蔵馬を伴ったミサトがやってきた。

「あら、ミサト。いらっしやい。どうかしたの？」

「ちよつち、調査結果聞こうかと思ってね。秀一君はおまけ？」

「おまけは酷いですね、ミサトさん。俺は使徒についてわかればって思ったですよ」

「あら、使徒について知ってどうするのかしら？」

「初戦と二回目、作戦らしい作戦ありませんでしたし、死にたくありませんから、少しでも知っておこうかと思ひまして」

「なるほど」

「酷い、しゅーちゃーん」

納得顔のリツコにぶーたれるミサトであった。

それはわずかな間でミサトの顔つきが変わる。

「で？ なにかわかったの？」

リツコが手元のキーボードを操作する。すると目の前のディスプレイに601の文字が表示された。

「？ ……なに？ これ？」

「解析不能のコードナンバーよ」

「解析不能のコードナンバー？ つまり、わけわかんないって事？」

「そうね。わかりやすく言えばそうなるでしょうね」

「でも、動力源はあったんでしょ？」

「らしきものはね。でも、一つだけわかったわ」

「一つ…？ 弱点でもみつかった？」

再び、リツコがキーボードを操作する。

「…これって…」

覗き込むように見るミサト。

「そう、人間の遺伝子と酷似してるわ。99・89%ね」

「99・89%… それって、エヴァと同じ……」

「エヴァと同じ?」

蔵馬が口を挟んだ。

「そうよ」

「そういえば、エヴァって人造人間でしたね」

「巨大ロボットに見えなくもないけどそうなのよ」

「見た目はともかく人間のような体型ですから、納得は多少できます。が、使徒はどう見て人間に見えませんか」

「そうなのよ。改めて、私達の浅はかさを思い知らせてくれるわ  
リツコはため息をついた。科学者として色々とかかわってきた  
彼女であるが、使徒ほど理解を超えるものはないらしい。

「そのようですね」

（まったく、俺はとんでもない所に来たようだな。……ん?）

蔵馬は、ゲンドウと冬月が来ていることに気が付いた。どうやら使徒の死体を見に来たようだ。

そこで、素早く二人の会話を聞き取ろうと集中した。

「これがコアかね?」

冬月がスタッフに聞いた。スタッフはいったん作業をやめて冬月に説明を行う。

「ええ。これ以外は劣化が激しく、サンプルとして問題が多すぎます」

「そうか… 南野どうする?」

「かまわん。他は全て破棄だ」

「わかった。情報を集められるだけ集めて破棄だ」

「了解しました」

スタッフはそういうと責任者の方へ向かって、ゲンドウの命令を伝えた。

（破棄か… そうだろうな。あれだけ巨大な使徒を保存してく場所もないだろう。）

蔵馬はそう思う。そのとき、ゲンドウが何気に手を後ろに組むのを見た。その手が火傷で覆われていた。

（あれは…）

「どうしたの？」

不意にミサトが声を蔵馬に向けた。会話に参加していたはずの蔵馬から反応が一切なくなったので心配になり声をかけたのである。

「いえ」

「あら、南野司令来てたのね。そっか、秀一君、司令を見てたのね」

「はい。……父さん、手のひら火傷してますね」

「火傷？ リツコ知ってる？」

「貴女がここへ来る前、零号機の実験中に事故があったの。聞いてるわね」

「聞いてるわよ。あの司令が素手でエントリープラグのハッチを開けてレイを助けたって聞いたとき、驚いたわ」

信じられないわよ、という顔をするミサト。それを見て呆れるリツコ。

「そんなことがあったんですね」

「その時のものらしいわ」

「怪我してかなり危険な綾波さんを出撃させようとした父さんとは同一人物とは思えないですね」

「意外に毒舌なのね」

「そうでもないと思いますよ」

（秘密でもあるのか…？ 綾波レイには…？）

## 第拾話 綾波レイ

しばらくして、リツコに呼び出されてリツコの私室。

「何か御用ですか？」

蔵馬は内心疑りながら答える。表情には一切出ていないが。

「帰るところごめんなさいね。ちょっとお願いがあるんだけどいいかしら？」

「人体実験は申し訳ないのですがお断りします」

さらにとひどいことを言う蔵馬。

「そんなことしません！　って誰から聞いたの？」

「ミサトさんです。真顔でそんなことを言っていました」

目はおもっいきりからかいの目だったが、とは言わない蔵馬。

「ミサトめ…　秀一君になんてことを…　後で覚えておきなさい…  
！」

「人体実験以外に何かありましたか？」

「秀一君……」

あきれるリツコ。

「すみません。本題はなんでしょうか？」

「ああ、ごめんなさい。これを届けてほしいのよ」

机の引き出しから一枚のカードを取り出し、机の上に置いた。

「これは？」

「綾波レイの更新カード。渡すの忘れちゃった。明日でもいいので、本部に来るときに届けてくれないかしら？」

「なるほど…　わかりました届けます。でも俺、彼女の家知りませんよ？」

リツコは住所の書かれた紙を取り出す。

「彼女の住所よ。これでいいかしら？」

リツコから紙を受け取り、読んでみる。

（マンモス団地と呼ばれる場所……彼女こんなところに住んでるのか。しかしこれで、綾波レイ……彼女の事を知ることが出来るかもしれない……）

蔵馬は溼の住んでいるマンションにやって来た。マンモス団地と呼ばれている場所である。

元々は、都市建設に従事した人々が住んでいたマンション街であったが、使徒の襲来による疎開で今では人の気配は全くない。対使徒のための設備建造のため、道路を挟んだ反対側のマンションの大半は壊されている。まさに廃墟と言っても差し支えない。

（…………… 4号棟の2階だったな。）

住所の書かれた紙を眺めながら歩く蔵馬。

（人の気配が全くない。それどころか、妖気や靈気類も全く感じない。こんなところに住んでいるのか。）

4号棟を見つけ、2階へ階段で上がっていく。そしてレイの部屋の前についた。

（俺が思うべきことではないが、女の子の住むような場所ではない。裏に何かあるとは思えないが。）

蔵馬はインターホンを何回か押すが、鳴った気配は無い。

（故障か…………）

「綾波さん？ いないのか？」

ドワノブに手をかけると、カギが開いてることが分かった。

（不用心だな。）

不審に思いながら、ドワを開け中を覗き込んだ。

目の前には殺風景な部屋があった。簡易的なベット、カラーボックス、小さな冷蔵庫が見える。

（……これが女の子の部屋なのか。）

蔵馬は女の子とは無縁の生活を送ってきた、自ら人との接触を避けて……だが、これは酷いと思った。

（父さん……いや、あの組織が何を考えているか知らないがこれは酷すぎる。ミサトさんに話してみるか。あの人の性格上なんとかするだろう。）

人を避けているようで、人物はよく観察している。これも昔からの習慣に近い。

そこへ、レイが奥から出てきた。

「!？」

流石の蔵馬も驚いた。シャワーから出たのだろっ、肩からバスタオルをかけた状態のまま出てきたのだ。

「何？」

「カードを届けに来たんだ。リツコさんがこれを渡すの忘れたそうだ」

蔵馬はレイに背を向けて、一枚のカードを取り出した。そしてそのカードの玄関わきの棚の上に置いた。

すると、後ろから濡のぺたぺたと歩み寄ってくる音が聞こえる。

「そう」

「それから……」

「何？」

「自分の部屋だからって、玄関まで裸の状態で出てくるのはよくないよ」

「そう」

その返事を聞いて、蔵馬は玄関を出てマンションの外へ出た。そして、レイの部屋を見上げながら思う。

（羞恥心とか無いのか？ あの少女は……それに感情というものが感じられない。）

数日後。零号機の起動実験が行われる日。

蔵馬は途中でレイを見つけ一緒に行くことにした。探るためでもあった。

「綾波さんは怖くないの？」

「何が？」

「エヴァに乗るのが」

「貴方は怖いのか？」

（……別に怖くはないが。魔界では日常茶飯事だったしな。怖いと言ってみるか、何か引き出せるかもしれない。）

「怖い…かな。怖くないっていう方がおかしいと思う」

「そう。貴方はお父さんの仕事信じられないのか？」

「父自体信じてない」

蔵馬がそう言うと、レイはずっと蔵馬を見た。

「私は信じてるわ。信じられるのは司令だけ」

そう言つと少し足早に歩いて行った。

（どうやら闇は深そうだな……）

## 第拾壹話 ヤシマ作戦

零号機起動実験直後、使徒接近の報が入る。ただちに実験は中止された。

作戦本部に戻った蔵馬たちは、ディスプレイ上に映し出された使徒に驚愕する。

「なんですか、あれ？」

ほぼ正八面体の幾何学的形状。どう見ても人類の生物学的概念からかけ離れている。そのようなモノが映っていたのだった。

「使徒よね……？」

蔵馬の質問に答えるミサト。

「パターン青ですので、使徒だと思われます」

オペレータが表示されているデータからそう判断したが、本人も信じられぬモノであった。

「体？に景色写ってますね…… えっと生物なんでしょうか？」

「多分としか」

「なんか常識がおかしくなりそうです」

蔵馬は素直に思った。その思いは一部の人々を除いて同じだ。

「最低でも人型してれば、様子見ながら対応できそうだけど、さすがに無理そうね」

飛行中の使徒が一定の場所に停止した。そして、下部からドリルのようなものが飛び出し掘削を始める。

「今度は何！？」

「この位置は……！！ 使徒、ジオフロント内ネルフ本部へ向かい穿孔しています！」

オペレータが解析して叫ぶ。どうやら直接攻撃を仕掛けてきたらしい。



「なんですって!!」

形状からして情報が少なすぎる使徒に対して、情報を集める。  
そして作戦会議が始まった。

「これまで採取したデータによりますと、目標は一定距離内の外敵を自動排除するものと推測されます」

ために使用した武器はすべて使徒に消滅させられていた。

「エリア侵入と同時に加粒子砲で100%狙い撃ち。エヴァによる近接戦闘は危険すぎますね」

「A・T・フィールドはどう？」

「健在です。相転移空間を肉眼で確認できるほど強力なものです」  
「生半可な攻撃では泣きを見るだけですね。こりゃ」

「攻守ともにほぼパーペキ。まさに空中要塞ね。で？ 問題のフィールドは？」

「現在、我々の直上、第三新東京市0エリアに侵攻」

「巨大なシールドがジオフロント内のネルフ本部に向かい、穿孔中です」

「冗談抜きで敵はここに直接攻撃を仕掛けるつもりですね」

「しゃらくさい。で？ 到達予想時刻は？」

「明日午前0時6分54秒。」

「その時刻には、全ての装甲防御を貫通してジオフロントに到達するものと思われます」

「あと、10時間足らずか……」

10時間しかないのか、10時間もあるのか。どちらにしても時間はあまりないとミサトは思う。

もう、白旗あげちゃうかなどと不謹慎なことを考えた瞬間、閃いた。  
これなら不可能ではないと。ニヤリと笑った。

「か、葛城さん……？」

横にいた日向マコトはその顔を見てビビった。

「いいこと閃いちゃった。やってみたいことがあるの。」

「目標のレンジ外、超長距離からの直接射撃かね？」

ミサトからの作戦を聞いたゲンドウと冬月。冬月はゲンドウを代弁するように言った。

「そうです。高エネルギー収束帯による一点突破しか方法はありません」

「MAGIはなんと言ってる？」

冬月はリツコに聞く。そこでリツコは端末に表示されているMAGIの回答を見せる。

「MAGIによる回答は、賛成2、条件付き賛成が1でした」

「勝算は0.87%か。高い数値ではないな」

「ですが、最も高い数値です」

「そうか、と渋い顔をする冬月。」

「ほかの作戦は？」

「ありません」

きつぱり言い切るミサト。冬月はリツコをちらりと見るが、リツコのその通りという顔をしている。

「そうか」

沈黙し、話を聞いていただけと思われていたゲンドウが口を開いた。

「超長距離射撃。反対する理由はない。やりたまえ、葛城一尉」

「はい」

最高司令官の許可が下りた。

作戦名『ヤシマ作戦』。

作戦内容、二子山の山頂からポジトロンライフルで使徒を超長距離射撃。

エヴァのパイロット控室。蔵馬はすでにプラグスーツを着ていた。

（これ、ぴっちりで着心地悪いな。まあ、妖狐の姿に代わる必要性もないし。問題ないかな。）

頭の中で愚痴っているとレイがやってきた。まだ制服姿だった。

「綾波さん」

レイは蔵馬を一瞥すると、手帳を取り出し、読み始める。

「明日、午前0時より発動されるヤシマ作戦のスケジュールを伝えます。南野、綾波の両パイロットは本日17:00ケイジに集合。18:00エヴァンゲリオン初号機、及び零号機、起動。18:05出動。同30二子山仮説基地に到着。移行は別名あるまで待機。明日0:00作戦行動開始」

一気に読み終わるとすぐに手帳をしまった。

「どんな作戦なのかな？」

「二子山からエヴァによる超長距離からの直接射撃。」

「!? A・T・フィールドを中和せずに？」

「そうよ」

（使徒の目の前に射出されるよりはマシか。でも思い切った作戦にでたな。）

蔵馬は少し考えた。現状最善のような気がした。そして時計を見た。16時をさしていた。

「60分後に出発よ」

その様子を見ていたレイが言った。

「了解」

## 第拾貳話 作戦決行

二子山仮説基地。そこへ蔵馬とレイがやってきた。作戦最終確認を行うためである。

途中、ポジトロンライフルの最終調整をリツコを蔵馬は見つけ、気になったことを訪ねた。

「こんな野戦向きじゃない武器のようですが、役に立つんですか？」

「仕方ないわよ。間に合わせなんだから」

「間に合わせ… ですか…」

「戦自研のプロトタイプを挑発してきて急きょエヴァ用に改造したの」

（大丈夫なんだろうか…？）

「理論上は問題ないけど、銃身や加速器が持つかどうかはわからないわ。こんな大出力で発射したこと、一度もないもの」

（あつたら、怖いな……）

素人的考えで、富士山消し飛ぶんじゃ？と思う蔵馬であつた。

そこへミサトがやってくる。先に基地に入ったレイを伴って。

「秀一君ここにいたのね。ちょうどいいわ、ここで本作戦における各担当を伝達します。秀一君。あなたは砲手を担当して」

「砲手？ わかりました」

「レイ、貴女は盾を担当して」

「はい。」

「盾ってなんですか？」

蔵馬はライフルに目がいつていて盾に気が付かなかった。そこで聞いてみることにする。

「ポジトロンライフルの横に立てかけてあるのがその盾よ」

リツコが説明してくれる。

「あれって… スペースシャトル？」

「そう、その底を急ぎょ改造して盾にしたの」

「二つだけ再度質問良いですか？」

「何かしら？」

「外れた場合の再チャージ時間と、盾使用時間を。一発で決められれば関係ないんですけど」

「再チャージは約20秒かかるわ。盾は約17秒が限度よ」

「二発目は考えるなという事ですか…」

「ごめんね、時間がなくてこれが精いっぱいなのよ」

「わかりました、やってみます」

「秀一君もういいかな」

「すみません、ミサトさん。そしてありがとうございます、リツ

「さん」

「じゃ、二人とも準備して。」

「「はい」」

「明かりが消えていく……」

目の前の灯りが次々と消えていく。おそろく、日本中が消えたのである。冗談抜きでとてつもない作戦である。

ついに自分達の周りの必要最低限な光を除き、全て消え去った。

「綾波さん」

「なに？」

「一つ聞きたい。何故、綾波さんはこれに乗るんだ？」

「絆だから」

「絆？」

「みんなとの絆。私には他に何も無いもの」

「なにもない？」

「もし、エヴァのパイロットをやめてしまつたら、私にはなにも残らないから。それは死んでいるのと同じだわ」

「そうなんだ」

（なんという闇の深さ。これもあの男の影響か。少し調べてみるか……）

零はプラグスーツの手首の所についている時計に目をやる。

「時間よ。行きましょ」

「ああ。」

零は蔵馬を見向きもせず、零号機に乗ろうとする。そこへ蔵馬は声をかける。

「綾波さん」

「貴方は死なないわ。私が守るもの。」

レイはそう言つと零号機の中に消えた。

初号機がポジトロンライフルを構え、その前に零号機が盾を持ち構えた。そして発射のカウントダウンが始まる。

……… 9

……… 8

……… 7

……… 6

「目標に高エネルギー反応！」

仮説基地でオペレータをしている伊吹マヤから焦りの混じった

報告がもたらされる。使徒の砲撃準備が始まったのだ。

「なんですって！ とりあえず急いで！！」

.....5

.....4

.....3

...2

1

「発射！」

蔵馬がスイッチを押す。ポジトロンライフルから陽電子が発射される。と、同時に使徒も加粒子砲を発射。

ほぼ中央でお互い干渉しあい、双方見当違いの方向に着弾することになった。

（しまった…！）

「く！ 第二射！ 急いで！」

ミサトが素早く指示を出す。しかし、使徒は間髪を開けず二発目の準備を始める。

「第二射！？ まずい！」

そして、使徒から再び加粒子砲が発射される。すばやく零号機が前に出て盾を構えた。

盾により加粒子砲は四散され続けるが、盾の溶解も始まっている。時間がない。

「綾波さん！」

思わず叫ぶ蔵馬。

そして、ついに盾が完全に融解する。ついに零号機その物が盾となり、初号機を守る状態となった。

（まだか…！）



人々にとつてとてつもなく長い時間に感じられた。そして、二発目の準備が整った。

蔵馬は迷わずスイッチを押す。中央で干渉しあうが、それも計算に入っていたのであるう、使徒中央をぶち抜いた。

使徒はそのまま炎上。倒れることになった。穿孔中のシールドはギリギリでとまった。

喜ぶミサトたちを尻目にポジトロンライフルを投げ捨て零号機に駆け寄る。盾はすでに原型をとどめてない。零号機も溶けはじめていた。

動かなくなつた零号機の背中の中のハッチをこじ開ける。エントリープラグを抜き取り、地面に置く。そして蔵馬は初号機から飛び降り駆け寄った。

（なんという熱気。彼女は無事なのか……！）

エントリープラグをこじ開けるため、ハッチに手をかけた。加熱してすごい温度だ。

（こうなったら……）

足元の草の葉を一枚引き抜くと、妖気を籠める。すると葉は少し長めのナイフになった。

その葉っぱのナイフでハッチを切り裂と、ものすごい煙がエントリープラグ内から吹き出る。煙が収まった後、中を見るとシートの上で気絶しているレイがいた。

（気絶しているだけか……）

すっと目を開けるレイ。それに気づく蔵馬。

「大丈夫？」

「…… ええ」

「勝ったね」

こういう時なんと言っていていいかわからなかった蔵馬はとりあえずそう言った。

「…… うん」

「どうしたの？」

「……ごめんなさい。こういう時、どんな顔したらいいのかわからないの」

（今回の場合、使徒に勝利した、俺を守り切った、だから喜びか。しかし嬉しいときにどうしたらいいのかわからないとは……）

「……笑えばいいと思うよ」

蔵馬がそう言つと、レイの顔に笑顔が浮かんだ。

「……行こう。歩ける？」

「大丈夫」

蔵馬はレイの手を取り、エントリープラグから出るのだった。

## 第拾参話 クー・シー

ここはリツコの私室。実際は実験室兼執務室兼私室である。ここでリツコは目の前の端末に向かいながら、先日行われた使徒戦を解析していた。

エヴァの損傷率、修復日数、修復費用、サンプルとしての使徒の死体の価値等々映りだされている。直接はリツコにはかわりのないものもある。

一つだけだが、矛盾をリツコは見つけていた。零号機のエントリープラグのハッチである。鋭利な刃物：刀剣の類：で切断された跡。南野秀一がレイを助けるために切り裂いた：という結果であるが、ではその刃物：刀剣の類：はどこからきたのか。だしたのか。

「秀一君： どうやったのかしら： ハッチを切り裂けるほどの武器は見つかってない：」

多少開けているとはいえ、山の山林の中。撤収作業中に調査してもらってもそのようなものは発見されなかった。

「それが、彼の秘密だっていうの：？ もう少し調査が必要ね：」

ほぼ同時刻。蔵馬は下校中である。転校初日は女の子たちにキヤーキヤー言われたり、男装の麗人に間違われたりしたが、今は静かだ。

極力他者との接触を避けているせいもあるが、ネルフ関係者とい

うこともある。ネルフってそんなに嫌われているんだろうか？ というか非公開組織だろうが…とも思ったこともある。

道を歩いていると、妖氣がつけているのに氣が付く。殺意がないため、氣が付くの遅れたのだ。

（妖氣…？ 護衛という名の監視がウロウロしているのは知っていたが、妖氣か。誰だ。）

相手に氣が付かれないように周りを探るがまったく見えない。

（かくれんぼがお得意のようだな。誘ってみるか…）

脇道に入る蔵馬。妖氣はそのままくっついてきていた。そして山林に入るとネルフの皆さんをまく。

（あとのこの妖氣の持ち主のみか。）

蔵馬は立ち止まると周囲に声をかけることにした。

「誰かな？ 俺を付けている奴は」

妖氣が揺らぐ。自分がいることに氣が付かれていたことに動揺が走ったようだ。そして、妖氣の持ち主はすーっと姿を現したのだ。

「氣が付かれていたのか…」

牛ほどある巨大な犬が現れた。

「クー・シー…？」

「いかにも我はクー・シー」

クー・シーとは、妖精が番犬として飼っている妖犬である。本来は妖精の住む丘の上などを守るのが仕事だ。番犬なので妖精たちに連れられていることが多いが、たまに一匹で人間たちの住む場所にも現れるという。

ただ、姿が牛ほどの大きさを誇り、暗緑色の毛が生え、足は人間の足と同じぐらいである。それだけの巨大さを誇るが、音を立てずに滑るように歩くのだ。

「俺に何かようか？」

「我はこの近くにある妖精の丘のクー・シー。巨大な妖氣を感じ、妖精たちがパニックを起こしかけた故、調べに降りてきた」

「巨大な妖気とは、時々やってくる得体のしれないバケモノのこ  
とかな？」

「いや、汝だ」

「俺？」

「そうだ、汝は何者だ。場合によっては…」

「殺すか。それが普通だな」

「何者だ」

「俺の名前は南野秀一。元・妖狐だ。」

蔵馬の名は極悪盗賊として名が売れすぎている。とりあえず伏  
せることにした。

「元？」

「死んで人間に転生した。もっとも前世の記憶や力はそのままだ  
が」

「なるほど」

「今は時々やってくる得体のしれないバケモノを倒すためにここ  
にいるので、そちらには干渉する気はない」

「それなら安心だ」

妖精の丘が近くにある…なら、長くここに住んでいるのだろう。  
なら何か掴んでるかもしれない。もっとも無関心を貫いているかも  
しれないが、と蔵馬は考えた。

そこで聞いてみることにした。情報は多いことに越したことはない。

「一つ聞きたい。先ほど話したバケモノに件で何か知っているこ  
とはないか？」

「知らぬ。妖精たちが無事であれば他はどうでもいい」

「確かにな」

「ただ…」

「ただ？」

「人間たちが予期していたのだろう。そうでなければ住む町丸ごと  
対抗できるようにするわけない」

「それはそうだな」

「妖精たちは多少、あのバケモノを気にしている。何か知ることができたら、汝に伝えよう」

「いいのか？ 基本人間へは干渉のはずだが」

「問題ない。それが妖精たちを守ることに繋がるなら」

「なるほどな。わかった。よろしく頼む」

「変わった人間、いや妖狐か。期待せずに待っていてくれ」

そう言つと、クー・シーはすーっと消えた。

蔵馬は山林を出る。今度は蔵馬を見失っていた監視たちの気配が困んだ。

（彼らは、俺を見失った件で減給かな？ 関係ないが… だが、小さいが情報網が一つできた。これで何かがわかるだろう）

別談。狐と犬は同じイヌ科であり、気が合ったのかもしれない…

## 第拾肆話 セカンドチルドレン

しばらくして、住居であるマンションに近づいてきたとき電話が鳴った。どうやらネルフからだ。

「はい、南野です」

『秀一君？ 悪いわね、ネルフに来てくれる？』

ミサトのようだ。

「次の使徒ですか？」

『使徒に関することだけど、攻めては来てないわ』

「新しい情報をキャッチしたという事ですか」

『ええ、そうよ』

「わかりました、向かいます」

ため息をつくと電話を切った。

ネルフに到着し、すぐさまネルフ会議室へ向かう。そこにはすでにレイ、ミサト、リツコがいた。

「遅れてすみません」

「いえ、これからよ。まずはこれを見てもらえるかしら？」

ミサトは目の前にある巨大スクリーンに映像を流す。そこには、輸送中の式号機の様子が映っている。

突如襲ってきた使徒との戦闘シーン。そして倒しているシーン。

「この後、戦艦二隻による零距离射撃。太平洋艦隊の力を借りたとは言え、出撃からわずか40秒で使徒殲滅。噂通りね。セカンドチルドレンの実力は」

「式号機の実力はわかりましたが、しかし何故使徒はあんなとこ

るに……？」

蔵馬は疑問を口に言う。今までは、ここ第三東京市へ侵攻していた。今回は海上だ。魚つばいので海なのかなとも思う。

「輸送中の式号機を狙ったとも考えられるわ」

「使徒は何らかの方法で自分たちの敵を認識したんでしょうか？」

「おそらく……としか言えないわね」

苦々しく言うミサト。サンプルは得られて、使徒の実態解析は一歩前に進んだが、目的等は不明のままだ。

（情報は、厳しそうだ。人間相手ならそれなりに読みやすいが、使徒はなんなのかすらわかってない。）

蔵馬の頭脳をもつてしても解析不能だ。情報が少なすぎる。

「話変わるけど……で？ どう？ 新しい仲間の戦いぶりは？」

秀一君？」

ミサトが蔵馬に聞く。からかいの目をしている。蔵馬が何か言ったらツツコム気満々だ。

「……………」

無言の蔵馬。

「興味ないの？」

残念そうなミサト。それを見て呆れているリツコ。

「ありません」

「セカンドチルドレンは金髪の美少女よ？ 食指起きない？」

今度はニヤリ笑いのミサト。蔵馬はそれを横目に見てため息をついた。

「俺より戦闘訓練を相当積んでいるようですので、戦闘はこれより楽になるでしょう」

「……ち」

期待していた返答ではなかったので、つまらない表情をするミサト。

「ま、いいわ。明日正式に紹介するわ。学校が終わったらまっすぐこっちにいらっしやい」



「わかりました」

その帰り道。と、言ってもまだネルフ内だが。

蔵馬は、レイがセカンドチルドレンの事を知っているのではない  
かと思い、聞くことにする。

「綾波さんはセカンドチルドレンの事知ってるの？」

「会ったことはないわ」

「どういう人とかそういうのも？」

「ないわ、興味ないもの」

「そうなんだ」

（他者は興味なし。あの男の事になると顔色が多少動くだけか。）  
レイからはセカンドチルドレンの情報を得られないとわかった  
すぐに切り替える。

「綾波さんはいつからエヴァに乗ってるの？」

レイ自身の情報を得ることにした蔵馬。

「八ヶ月前から」

「そう言えばミサトさんが、綾波さんはエヴァとシンクロするの  
に七ヶ月かかったって言ってたな…… やめたいって思わなかった  
の？」

「いいえ」

「……………」

「……………」

「私にエヴァに乗る他に価値なんてないわ」

「価値？」

「ええ。エヴァに乗ることこそが私の存在価値。生きる意味だも  
の」

「……………」

蔵馬は澪の顔を見る。表情はいつもの無表情だ。

（嘘や冗談ではなさそうだ……）

そこで蔵馬は使い魔を使うことにした。最下級妖怪クラスで妖気も低く、人間には見るできない優れもの。ネルフの世界最高レベルの監視機器でもキャッチできない。

先ほどのクー・シーの件もあるが、人間・南野秀一では得られる情報が極端に低い。ゲンドウも話すと言っておいてネルフ自体にいないし、もとより話す気はなさそうだ。

（綾波レイと…赤木リツコ…この二人だな。あの男は今はいないので、帰ってきたら憑けるか。葛城ミサトは…何も知らなそうだ。そう見せかけてる曲者かもしれないが。）

レイと別れるときに、一匹の使い魔をレイに憑けた。これで少しは情報は得やすいだろう。

（年頃の女の子に憑けるのは気が引けるけどね……）

## 第拾伍話 アスカ登場

セカンドチルドレンの戦闘記録を見てから数日後。蔵馬は訓練の名目でネルフに向かった。

そして、ジオフロントへのゲートに向かって歩いてみると、何か叩くような音を聞いた。

(……………?)

一応、警戒してゲートへの曲がり角で止まりこつそりと覗く。ネルフの敵対組織が…とは考えにくい。用心はこしたことはない。

「なによ!! この機械! 壊れてんじゃないの!？」

若い女性の声。少女のようだ。

(……………侵入者では無いようだが?)

「んもー……っ!! このカード作ったばっかなのになんで受けつけないわけ!？」

(こここの関係者か? そういえば彼女金髪だな。ミサトさんが言っていた例の子か?)

確認と警戒を含め、蔵馬は角から出て来て少女に声をかける。

「どうした？」

「受け付けないの!! ……ってアンタだれ？」

蔵馬を睨みつける少女。

(元気すぎるような気がするな。)

「ちよつと、そのアンタ! 聞してるの!？」

「聞こえている」

「アンタだれ？」

「普通は自分から名乗るもんだが、まあいいだろう。俺は南野秀一。君は惣流アスカラングレーでいいのか？」

「アンタが…サードの… そうよアタシがアスカよ」

「わかった」

蔵馬はそういうと自分のカードを通す。

「一緒に入るう」

「え？ あ…」

「どうした？」

「ありがとう…！」

（…………俺に何か言われると思ったのか？）

蔵馬は、アスカと一緒にゲートを通過する。

「余計なお世話かもしれないが、そのカード開始日は何時になる？」

「開始日？ え」と

アスカは自分のカードをマジマジ見る。

「…明日ね」

「それじゃ、受け付けるわけがないですね」

「ぬう」

「葛城ミサトは知ってるかな？ そのあたりに言った方がいいと思うよ。今度は出れなくなるし、不法侵入者扱いされるかもしれない」

「そうするわ…」

特に会話することもなく…アスカは蔵馬への警戒感バリバリ発信中…通路と一緒に歩く。しばらくして、ミサトがやってきたのでアスカを押し付け、自分は訓練に向かうことにした。

（警戒されるほど何かやったつもりはないが…使徒を倒しすぎたせいか？ しょうがない、彼女にも憑けるか…それにしても自分以外周りはすべて敵。魔界に居たころのようだね。）

そのころのネルフ司令室。ゲンドウは謎の男といった。

「いやはや。波乱に満ちた船旅でしたよ。やはり、こいつのせいですか？ 硬化ベークライトで固めてありますが、生きてます。間違いない。人類補完計画の要ですね」

そう言つとトランクを机の上に置く。そして、手馴れた感じでトランクを開けると、何かで固められた胎児のようなものが入っていた。

「そうだ。最初の人間、アダムだよ」

ゲンドウはにやりと笑った。

蔵馬は短時間であるが訓練を終え、少し遅めの昼を頂くために社員食堂に来ていた。一緒に訓練していた…会話は一切ないが…レイも一緒だ。

時を同じくして、ミサトとアスカがやってきた。昼食を取りに来たようだ。

「秀一君とレイも同じ時間だね。じゃ、なんでも好きなもの頼んでいいわ。ここじゃ大したもの無いけど、おごっちゃうわ」

「ミサトさん。昼間っからビールはダメです」

「しーっ！ 黙ってりゃわからないわよって、秀一君なんでそんなことを！？」

「いやなんとなく飲みそうだなって思いました」

「感が良すぎるわよ…」

そして、席に着く四人。

パイロット同士交流を深めてやろうという意図だろう。ミサトがまず口を開いた。

「そうそう、使徒との戦い。見せてもらったわ。さすがね」

「あつたり前じゃない。このアタシに出来ない事なんてないわよ。あの程度の敵、ちよちよいのちよいよ」

「さすがに厳しい訓練を受けただけのことあつて、洗練された印象を受けたわ。秀一君とはまた、違ったタイプの強さね」

「違ったタイプ？」

アス力は蔵馬を指差して言った。

「そう、秀一君はなんて言うか… 戦いのセンスがあるって言うか… なんか場数踏んでる傭兵な感じが…」

しどろもどろになりながら言うミサト。

「俺は一応高校生ですので。どうすれば傭兵になれるんですか？」

「そうよね。なんでそう思ったのかしら？」

首をかしげるミサト。

(…無意識に妖狐・蔵馬が出ていたか？ 自重はしていたが…)

「変なの。それにミサト？ じゃあ、何？ アタシにはセンスが無いって言うの？」

「いやいや、そう言うわけじゃ…」

「ミサトさんはそんな事言ってないよ。それに年上の人に対する言葉遣い悪いかな」

黙々と昼飯を食べながら言う蔵馬。ミサトはそれを見ながら、秀一君は毒舌の癖に…と呟いていたが蔵馬はスルーした。

「なによ、えらそうに」

ギンツと睨みつけるが、涼しい顔の蔵馬。

「うるさいわね！ アタシの勝手でしょ！？ 男の癖に長髪なんかにしちゃってさ！」

「これはただの趣味だ」

「まあまあ二人とも、喧嘩しないの。」

うがーっと噛みつかんばかりのアス力をミサトがなだめる。そこへ、ミサトを後ろから抱きしめる者が現れたのだ。

「うぐ！ やめて！」

「加持さん！」

アス力が嬉しそうに言った。

「どちらさんですか？」

「おっと、自己紹介がまだだったね。ネルフドイツ支部からアス力のお供でこっちに異動になった加持リョウジだ。よろしくな」

「南野秀一です。よろしくお願いします」

（何者だ？ 只者ではなさそうだ…… 本当に敵ばかりだな…

彼にも憑けておこつ…）

## 第拾陸話 分裂使徒

「あゝあ。日本の学校ってツマンナイの！」

放課後。訓練の名目でやってきたアス力が開口一番に言った。

「それにあの先生馬鹿じゃないのかしら？ 政府の流したウソの情報を長々と喋ってさ」

「……………」

たまたまアス力に出会ってしまった蔵馬は、彼女の愚痴を聞かされる羽目になった。

「ちよつと、シユウイチ！ 何か言ったらどうなの！？」

「…………… なぜ俺に言う。文句があるなら、学校行けと言ったネルフ上層部に言ってくれ」

「なんですって！？」

アス力は妙に蔵馬に好戦的であった。素人でありながら3体も倒していればそうであろう。幼い時から訓練してきた自分より、ぽつと出の素人が気に入らないのである。

「悪いけどそこ… 通してくれる？」

遅れてきたレイが後ろから声をかけた。アス力是不機嫌な顔で道を譲る。

「コイツは何もしてないくせに偉そうに…」

「やめろ」

「まあ、いいわ。残りの使徒はアタシが倒してくれるわ！」

「そう」

「！？ 何を…！」

「惣流やめろ」

「このオンナ…！！」

「私たちは使徒を倒すのが役目。そうでしょう？」



「そうよ!」

「ならそれでいいじゃない」

「ぬ。ぐぬぬ…」

レイに正論っぽいことを言われてうなるアスカであった。

ネルフの元に使徒が現れたと言う情報が入った。零号機はまだ使えないため、使徒撃退には初号機と弐号機に任される事になる。

「あゝあ。せっかく日本でのデビュー戦だつて言うのに、なんでアタシ一人にやらせてくれないのかしら? しかもこんなヤツと一緒だし」

弐号機の中でアスカが愚痴を言う。

「男の癖にロンゲよロンゲ」

「惣流聞こえてるぞ。長髪なら加持さんもだが」

「加持さんはカッコいいから良いのよ! アンタとは別よ別」

『そうですか』

「そうそう」

そこへ割り込み通信が入った。ミサトだ。

『何をこんな時に言い争いをしてるの!?』

「してないわよ!」

「まったく。二人ともいい? 先の戦闘で追撃システムが受けたダメージが回復してないので、実戦での稼働率はゼロ。よって今回の迎撃は上陸直前の目標を水際で一気に叩く! 初号機と弐号機は目標に対し波状攻撃。接近戦で行くわよ」

「りょーかい」

『了解』

「でも、二人がかりなんて卑怯でやだな。趣味じゃない」

『来たわよ!』

海面から水柱が次々と上がる。海中を泳いできた使徒の姿が浮かび上がる。今回は人型の使徒であった。

「よし! アタシの腕前、見せて上げるわ! シュウイチ! よつく見てなさいよ!」

ナギナタのような武器を持って使徒に突撃する式号機。

（ま、やらせてみるさ。しかし……今までの使徒とは何か違う。姿形じゃない。気配が複数感じるが……）

使徒の気配を探っていた蔵馬であった。複数の気配を感じたが、現れたのは一体。どこかに隠れているのではないかと判断する。

式号機は使徒を一刀両断にした。

「どう? シュウイチ? 戦いは常に無駄なく美しくよ!」

おーっほっほっほっ と言うような笑い声が聞こえそうである。

『お見事! と言いたいんだが……まだ動いてる』

「え!?!」

真ん中で真っ二つに切り裂かれた使徒が再び動きだすのが蔵馬に見えた。そして、断面がモリモリ膨らむと、ぶりんと妙な音を立てて再生した。

「い!?!」

アス力は倒したはずの使徒が再生したのを見て驚く。しかも分裂して二体になったのだ。

（気配が複数なのはこれのせいか。切り裂かれると分裂するのかもしれない）

蔵馬の判断は間違っていたが、素早く修正する。

分裂した使徒の一体は弐号機へ突進。弐号機はこれに対応し、再び切り裂くがすぐに再生した。何度も攻撃を加え切り裂くが無駄であつた。一瞬で再生してしまう。

「何コイツ……！」

「惣流。コイツは切り裂かれると再生する。そしてさっきのように完全に切り裂かれると分裂して別個体になるようだ」

「なんてインチキ」

「弱点を探さないとどんどん増えるぞ。惣流が幾ら強くても10体の使徒にはかなわんだろう？」

「無理に決まつてるでしょう！？」

アスカが蔵馬と会話中に使徒の一体に足を掴まれた。アスカが切りあつていた使徒とは別の個体だ。片方に気を取られていたため、接近に気が付かなかったのだ。

そして、使徒はそのまま弐号機を持ち上げると初号機の方へ放り投げた。

「うわーっ！っ！っ！」

弐号機をみごとキャッチする初号機。

「大丈夫か？」

「大丈夫よ！ 降ろしなさい！」

「はいはい」

初号機は弐号機をやさしく下す。目の前には二体仲良く並んでこっちを見ている使徒。冷笑しているようにアスカには見えた。

「こんな敵、どうすれば良いのよぉ……！！！！！」

## 第拾漆話 同居

『本日、使徒甲・乙の攻撃により、エヴァ初号機及び弐号機共に活動を停止』

『同日、作戦指揮権をネルフは断念。国連極東方面軍に移行』  
ネルフ首脳陣と蔵馬たちは黙って惨めな報告を聞いていた。

「無様だな」

「申し訳ありません、副司令……」

しよぼんとしたミサトが答えた。ここにはゲンドウに冬月、リツコ、もちろん蔵馬たち三人もいた。目の前の大型ディスプレイには、頭から地面に突っ込んだ二体のエヴァが映っている。何とかしようとしたアスカ。フォローしようとした蔵馬。結果、二人とも吹き飛ばされこの現状だ。

（……………補完しあっているな、あいつら。二人で一人か。）

対処法を考えてる蔵馬であるが、あったとしても実行はできそうもない。アスカが相変わらず反発するのである。

『同日、新型NN爆雷投下。目標攻撃』

大型ディスプレイ画面では、ステルス爆撃機が上空より使徒に攻撃を加える。そして、巨大なキノコ雲が上がった。しかし、使徒には大したダメージを与えられてない様子。焦げただけだ。

『これにより、敵、構成物質の25%の焼却に成功』

（焦げただけとは…）

「死んでいるんですか？ これ？」

アスカは恐る恐る聞く。

「いや、死んではおらんよ。足止めにすぎん。再度進行は時間の問題だな」

「は… はあ……………」

そこへ今まで沈黙を保っていたゲンドウが重い口が開く。

「パイロット両名」

「は、はい」

「……」

「君達の仕事は何かわかるかね？」

「エヴァの操縦です。」

冷や汗を垂らしながら答えるアス力。さすがの彼女もゲンドウには逆らえなかったようだ。

「違う。使徒に……」

「使徒を倒すこと。違う？ 父さん」

ゲンドウの声に蔵馬の声が被さる。二人が目線を合わせた。

「秀一の言う通りだ。こんな醜態をさらす為に我々は存在しているのではない」

ゲンドウはそう言つと、立ち上がり、冬月を伴って部屋から出て行った。

惨めな報告会議が終わり、部屋から出てきた蔵馬の足を思いつきり踏んづけるアス力。

「……痛い」

「全てはアンタの所為よ！！ 何でアタシまで司令にあんな事言われなきゃいけないのよ！！！」

「俺の？」

「そーよ！！！！ グズで鈍感なアンタがアタシの足を引っ張るからでしょうが！！！！！」

「……」

「今度は沈黙？ ははゝん。本当の事言われて何も言えないのね？」

蔵馬はこれ以上相手にしても無意味だと悟り、何も言わないだ

けである。だが、アスカの機嫌を悪くするだけであつた。  
(…………父さんたちの前とは態度が違うな、この子。)

ネルフのミサトの執務室。別名カオス。そこへやってきた蔵馬。ミサトより来るように言われやってきたのだ。ちなみにアスカがガニマタで先に行っている。

蔵馬の何時もの表情と、機嫌悪さMAXのアスカを見比べ、ミサトは今後の作戦を説明した。

「本当ですか？」

呆れて蔵馬が言った。

「ほんとうよん」

ミサトが対使徒との作戦として提案したのが同時に使徒の光球の破壊であつた。そのためにはぴったりとあつたコンビネーションが必要である。そのコンビネーションを作り出すために提案が……アスカと蔵馬の同居。しかも使徒復活まで同室で暮らすというものだつた。実際は長時間のダンスの練習なのだが。

「命令拒否は認めません 時間が無いから」

さも楽しそうに言うミサト。

「ちょ…………ちよつと、みさと……！……シ……南野君が夜ムラムラ来て、襲ってきたらどうするの……！」

「大丈夫 秀一君、そんな度胸無いから」

(…………どういう目で見ているんだろう？ ミサトさんは？)

蔵馬は元々妖怪であり、人間界と縁を切つて魔界へ帰ろうと思つていたぐらいなので、人間関係はあまりよくない。目的である使徒打倒とゲンドウ調査のためにここにいるだけなので学校では、女生徒にはもてるがデートしたりすることもない。基本誰ともかわらないように最小限の動きしかしてなかった。

逆にそれが蔵馬のクールさに女生徒の人気急上昇。男子生徒の嫉妬急上昇なのは別の話である。

「でも……」

しづるアスカ。ミサトはそれを無視するかのように言った。

「明日は午前六時起床よ 報告書出さないといけないから、先に行くわ じゃあね」

部屋を出ていくミサト。それに噛みつくアスカ。

「ちよつと!! 待ちなさいよ!!! 話は終わってないわよ!!  
!……!」

一日目……

同じ部屋にベット二つで眠る二人。訓練疲れである。しかし、蔵馬はヒッソリ起きていた。目だけで周りを見回し、隠し監視カメラの存在をチェックする。

（訓練を名目に何が起きるか楽しんでるんじゃない？）

二日目……

音楽をかけ、決められたステップで同じステップを踏む。息を合わすための訓練である。蔵馬はアスカに動きを合わせ、アスカはわが道に行く。先は長そうだった。

三日目……

進展はあまりない。隠し監視カメラで見ていたミサトが秀一に動き（アスカに襲い掛かる等）がないので不機嫌だった。

四日目……

二人が踊っているのをミサトと様子を見に来た加持が見ていた。

「アス力」

「はい」

「何度言ったらわかるの？ 一人で飛ばさないで秀一君にあわせるのよ」

ミサトはちゃらんぼらんなアホに見えるが一通りの訓練を受けた軍人でもある。二人のわずかな差を見抜いた。アス力の方がわずかに先行しているのを。

「南野君のレベルに落としてやるなんてアタシには出来ません。

それに南野君がアタシにあわせれば済む事です」

「俺は初日からあわせているけど」

「嘘ばかり……」

「何故君は、肩に力を入れてるんだ？ そりゃ、君はすでに大学を卒業し、エヴァの操縦は俺より上だ。でも、自分が特別ななんて思わない方がいい」

「アンタ……このアタシに忠告する気！？」

うがーっと噛みつかんばかりのアス力。蔵馬はそれを見つつ続ける。

「忠告？ そんなつもりはないさ。でも、疲れるだろう？」

「なんですって！？ アンタ何様のつもりなのさ！！！」

蔵馬はそれを見て、すっと部屋を出て行く。

「ちよつと、秀一君！？ 何処に行くの！？」

ミサトがその行動に驚き声をかけた。

「外の空気を吸いに行つてきます。今のままじゃ無理ですので、彼女が落ち着いたら教えてください。それじゃ」



## 第拾捌話 再戦

四日目……

蔵馬が部屋を出て廊下へ出て、公園のような場所にやってくる。地下にある空間だが、外にいるように感じた。

（人間の技術はすごいものだな。おっと、今の俺も人間だったな。）

噴水まであり、近くにあるベンチに腰を掛けた。

（さてどうなることやら。）

蔵馬は呼び出しがあるまでここにいることにして目をつぶった。やることは特になのである。

そこへ、わずかな妖気を感じる。ここは地下にあるネルフの施設である。妖怪がいることに内心驚く。

その妖気の持ち主が声をかけてきた。

「このような場所にいたのか」

蔵馬が目を開け、声のした方に顔を向けると、牛のような大きな犬が一匹いた。

「クー・シー？ なぜこのような場所に？」

「汝を探していた」

「俺を？ 妖精の丘とやらには手を出してないはずだが」

「例のバケモノについて情報が入ったのでな。我や妖精たちには全く関係ないので放っておくつもりであったが、汝の事を思いだしてな」

「例のバケモノ？ 使徒のことか」

「人間たちはそう呼んでるな。長く妖精の丘を離れられないので簡潔に言う」

「わかった」

「ここの大深度地下に妖精が迷い込んでな。そこで十字架に張り付けられた七つ目の巨人の上半身を見たそうだ」

「十字架に張り付けられた七つ目の巨人の上半身だと？」

「詳細は不明だ。興味もないがな」

「そうか、わかった。ありがとう」

「それはなにより」

（十字架に張り付けられた七つ目の巨人の上半身か…… 使徒の目的はそれか？ 奪還しに来てると？）

蔵馬の考えは、当たらずと雖も遠からず。だが、確証がない。

「む。人間が来たようだ。我はここで消えるでしょう」

クー・シーはそういうと消えた。そして、クー・シーが言っていた人間がやってきた。加持だった。

「加持さん？」

「秀一君ここにいたのか」

「彼女落ち着いたんですか？」

蔵馬がそう聞くと、加持は難しい顔をした。

「アス力は何か考え込んだままさ。ただ、ミサトがね」

「ミサトさんが？」

「ものすつごく、機嫌悪い」

「……」

「悪いけど戻ってくれないかな？ 八つ当たりで殴られそうで」

「…… わかりました」

蔵馬はそういうと立ち上がり、戻っていく。

その後ろ姿を見ながら加持は思う。

（彼は一体？ 資料では特に気になることはなかったが、俺の感が警報を発している。新たな勢力の手のものなのか？）

最終日……

明日決戦。最後の訓練が始まる。

「シュウイチ」

先に来ていたアスカが蔵馬が来ると口を開いた。

「何かな」

「これだけは言える。アタシはアンタを認めない。でも、今は使徒を倒すことだけを考える。アンタの言われたことも後回し」

「何だか知らないが少しは肩の力が抜けたか？」

「どうかしら」

そこへミサトがやってきた。後ろには加持もいる。

「まだ、喧嘩中かしら？」

「さあ、どうだろうな。でもやらなきゃいかんだろう」

「加持がまともなことを……！」

「俺をなんだと」

呆れる加持。

「まあ、いいわ。二人ともさっさと始めるわよ！」

使徒再戦当日。

ネルフの予想通り、自己修復の終わった二体の使徒が行動を開始した。

「来たわね。秀一君？ アスカ？ 準備良い？」

「…… いつでも」

「何時でもいいわよ」

それを聞いたミサトはエヴァ発進を指示。地上に射出されるエヴァ。目の前には使徒が二体、並んで待っていた。あざけ笑うよう

な感じもする。

「ミュージックスタート!!」

エヴァ内に音楽が流れる。コンビネーションの訓練のために散々踏んだステップのときにかかっていた音楽だ。

音楽に合わせてエヴァ二体が使徒に向かって膝蹴りを喰らわせる。

そして、その反動を利用して一回転して着地した。

同時に近くの兵装ビルが開き、パレットガンが現れる。それを素早く掴むと使徒に向かって乱射し、使徒は煙に包まれる。

その煙を突き破るかのように使徒がエヴァに向かってビームを発射。これをばく転をしながら、かわしつつ後退した。

途中の道路から壁がせりあがる。その後ろにはパレットガン二丁が設置されていた。

素早くそれをとるとその壁に隠れつつ、乱射。しかし、使徒はジャンプして回避し、その壁を切断する。

(なんと回避能力。)

使徒の動きに感心しつつ、蔵馬は次の行動に移った。

三枚になった壁から左右へ散る。そこへ、ビルに偽装した兵器からミサイルの援護射撃が入る。

使徒は再び煙に包まれた。ダメージこそ与えられないが、煙幕としてなら役にたつ。

体制を整えたエヴァは、再び空中にジャンプする。

『シュウイチ!!』

『...』

空中を一回転して、使徒のコアに向かって蹴りを放つ。同時にコアと思われる球体を破壊した。

そして、使徒は大爆発をした。エヴァもその爆発に巻き込まれる。

その煙が消えた後、巨大なクレーターのような穴と重なりあっ

て倒れているエヴァの姿があった。

## 第拾玖話 アダム

（ここになにがあったんだ？）

セカンドインパクトで廃墟になった場所にポツリとある町工場跡。そこにスーツ姿の男が現れた。加持だ。

周りを警戒しながら、壊れかけた半開きのドアを開けて入ると何もなかった。あるのは錆びついたデスクと線の切れた黒い電話のみである。

（……やっぱり）

ふと加持は自分以外の気配を感じた。一瞬で警戒態勢に入る。懐にある銃に手が伸びた。

「私だ。流石だな、加持」

「驚かせないでくれないか？」

「そんなつもりはないんだがな」

現れた謎の男と壁を挟んで会話をする。加持からは一切見えないが誰が来たかはわかっていた。

「マルドゥック機関とつながる108の会社の内、106がダミ―だ」

「ここが107個目というわけか」

「そして、この会社の登記簿に書かれている取締役の欄……」

「南野、冬月、キール……か？」

「さすがだな、加持」

「知ってる名前ばかりなんでね。マルドゥック機関。エヴァンゲリオン操縦者選出のために儲けられた人類補完委員会直属の諮問機関。だが、活動は非公開でその実態も不透明」

「貴様の仕事はネルフの内偵だ。マルドゥックに顔を出すのはまずいぞ」

「ま、何事も自分の眼で確かめないと気が済まないたちなんぞ」  
「そうか。でも気をつけるんだぞ。奴ら何を考えているかわからないからな」

加持はおもむろに懷から煙草を取りだし火をつけた。

「緊張感のない奴だな」

「そうか？」

「まあいい」

壁越しの男はそう言い残し気配が消えた。

「やるねえ。俺も行きますか」

周りを警戒しながら、加持もその場を後にした。

しかし、足元に奇怪な生き物が走って行ったのは気がつかなかった。

蔵馬に割り当てられたマンションの一室。監視カメラや盗聴機などが仕込まれていたが、すでに無効にしてある。マボロシ科の魔界植物を利用して偽りの映像・音を流しているのである。

しばらく使徒がやってこないのも、高校からここへそのまま帰宅。

そして、放っていた使い魔を交代で回収して情報精査を行っていた。

（俺たちを選んだという機関はダミーか。）

加持に憑けていた使い魔の報告。

（あの男や冬月さんが頭が良いとはいえ、ここまで動けるものではない。裏に巨大な組織がいるのか。）

他の人物に憑けていた使い魔からの情報は、有力なものはない。綾波レイを除いて。

彼女の情報は全くないのだ。学校行った、ネルフに行った、家に帰った、などといった情報のみだ。あまりにも薄すぎる。

（俺や惣流より先に決まったチルドレン。しかもあの男にかなりの信頼……いや、世界の中心にいるという感じだ。何かない方がおかしすぎる。要調査だな。）

蔵馬が最後に気になったのは、クー・シーからの情報。

（七つ目の巨人の上半身か…… こっちの方が先の方がいいな。）  
さっそく行動に移った。

ネルフにやってきた蔵馬。この関係者なので入場は可能だ。ただ、見て回れる箇所はかなり少ない。

（俺の権限で回れないことろといえば……ターミナルドグマ……行ってみるか。）

ターミナルドグマへの道を進む。監視カメラなどはマンションと同じく偽りの映像を見せている。

かどを曲がろうとしたら、向こうからミサトがやってきた。蔵馬は素早く身を隠す。

ミサトはそのまま、蔵馬に気付かず行ってしまう。かどから顔を出す蔵馬。

（ミサトさんの様子に変だな。しかも歩いて行っただ方はターミナルドグマの方だ。何かあったのか？ つけて行ってみるか……）

ターミナルドグマへの扉の前。一人の男が扉に手をかけようとしたとき、男の頭に銃が付きつけられた。男は思わず手を挙げた。

「君か」

「これがあなたのホントの仕事？ それともアルバイトかしら？」  
「これが貴方の本当の仕事かしら？ それともアルバイト？ 加



持？」

「どつちかな」

「特務機関ネルフ特殊監察部所属加持リョウジ。同時に日本政府内務省調査部所属加持リョウジでもあるわけね」

「バレバレか」

「ネルフを甘く見ないで」

「南野司令の命令か？」

「私の独断よ。これ以上アルバイト続けると危険だわ」

「どうかね？ 南野司令は知りつつ利用しているよ。でも君に言わなかったことは謝るよ」

「謝られても嬉しくないわ」

「そうかい。じゃあ、良いこと教えよう。これが、南野司令たちが隠していることの一部だ……」

加持は銃を突き付けられながらも、懷から一枚のカードを取りだし、扉に通した。

すると扉は開き、二人は中に入った。

「こ……これは……！」

ミサトの目には、巨大な十字架に張り付けられた七つ目の仮面をつけた巨人の上半身が入った。

「エヴァ……？ 違うわ、まさか、これは……！」

「人類補完計画の要……そしてすべての始まりでもある……」  
「……！」

「……アダム……」

加持は静かにそう言った。

「アダム……！ 一番最初に発見された使徒がこんなところになるほど、ここは私が思うほど甘くないってことね」

開け放たれた扉。その外では蔵馬が立っていた。二人に気付かれず。

（これが、この秘密の一つか。あの男はこれを使って何を企んでいる…？）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3941z/>

---

妖世紀エヴァンゲリオン Re-Make

2012年1月8日18時52分発行